［調査・研究報告］

弥生時代中期後半土器の併行関係と暦年代観

河合　忍

はじめに

近年、弥生時代中期後半の暦年代をめぐる議論が盛んである。その発端は、1995年大阪府池上曽根遺跡において巨大な東西棟持ち柱建物が発見され、この大型建物の柱根の年輪年代測定を行った結果、紀元前52年と断定された（秋山1996・光谷1996）ことに始まる。柱穴堀り方から検出された土器は河内Ⅳ－３様式（寺澤・森井1989）、中期後半に属するものと比定されており（秋山1996）、中期後半の暦年代が紀元前１世紀代を中心とすると考えられている。これは、近畿地方のこれまでの暦年代と比べると50～100年さかのぼったこととなるのであり、大きな話題をよんだ。一方、北部九州では、大陸製青銅器から実年代を求めており、後期の始まりを西暦紀元前後とおく説（橋口1979、柳田1983）が提出されていたため、弥生時代後期の始まりは九州と近畿では大きくズレが生じていたが、今回の発見により、両地域における暦年代の大きなズレはないと考えられるようになってきた。

北陸においては、古墳時代初頭・布留０式併行期の暦年代データが提出されている（光谷1995）が、弥生時代の暦年代については論究されることが少なかった[1)]。幸い、弥生時代中期後半土器の併行関係を窺うことのできる資料は、近年、増加傾向にあるため、間接的にではあるが、暦年代を類推することができるようになってきた。

本稿では、北陸における弥生時代の暦年代を与えることを目標とし、まず、中期後半における土器の併行関係を整理したい。それを基礎として、近年の暦年代をめぐる議論を視野に入れつつ、北陸の弥生時代中期後半に大まかな暦年代を与える作業を行い、今後の研究に備えたいと思う。

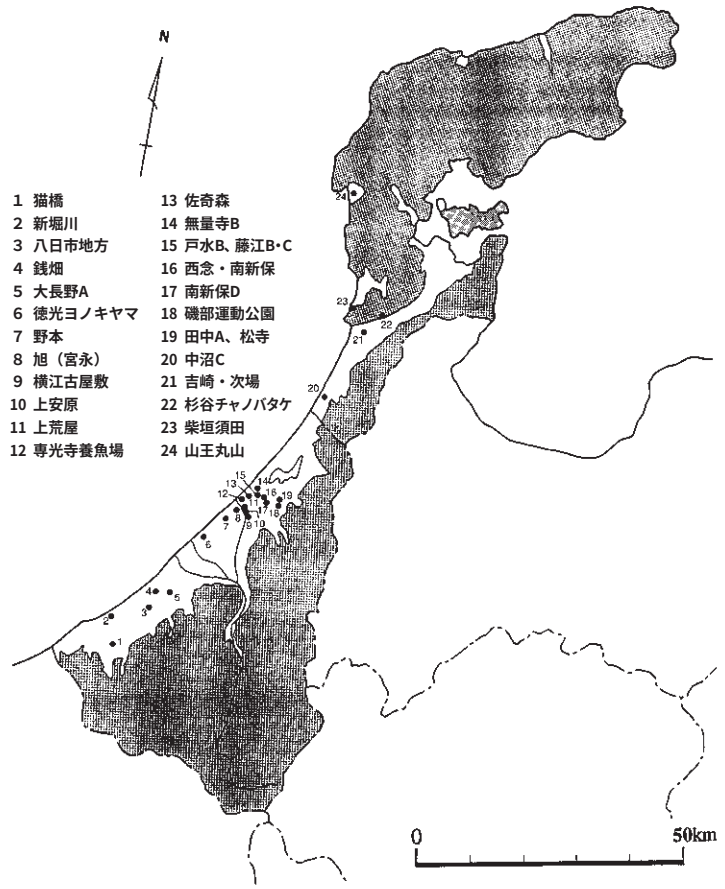
北陸における弥生時代中期後半の土器編年　（第１表）

近年の研究動向をみると、凹線文の採用を基準として、中期前半（畿内第Ⅲ様式併行）と中期後半（同第Ⅳ様式併行）とを分けることが主流となりつつある（深澤1986、溝口1987、寺澤・森岡編1989・1990ほか）。これは凹線文の採用と普及が第Ⅲ様式の様式構造に大きな変革をもたらしたとの考えによるものである（寺澤・森井1989、森岡1990）。北陸（加賀）においても、凹線文の採用（凹線文系土器[2)]の受容）は様式構造に大きな変革をもたらしたと判断できることから、凹線文の採用を基準として、中期前半と中期後半とを分けている（河合1996・2000）。

北陸の中期後半（第Ⅳ様式）の土器編年は、大きく３時期〔磯部式－専光寺式－戸水B式、筆者のⅣ－１～Ⅳ－３様式（河合1996）〕に区分されており（増山1988・1992、楠1989・1992・1996）、それぞれ西日本で指摘されている凹線文系土器の出現期・盛行期・衰退期（寺澤・森岡編1989・1990）と対応すると考えることができる（河合2000）。また、凹線文系土器は時期を経るごとに徐々に全体における量比を増す傾向にある（河合1996）。本稿では、凹線文系土器が衰退期の様相を示すが、在地系土器を数的に凌駕する戸水B式（北陸Ⅳ－３様式）の段階に注目し、西日本各地における土器の併行関係をまずは追求してみることとしたい。

第１表　編年対照表

北陸（加賀）			摂津	北丹波
増山(1992)	楠(1996)	河合(1996)	森田(1990)	田代(1992)
磯部式	西念・南新保 1－1	Ⅳ－1	Ⅳ－1	Ⅳ－1
専光寺式	西念・南新保 1－2	Ⅳ－2	Ⅳ－2 Ⅳ－3	Ⅳ－2
戸水B式	西念・南新保 1－3	Ⅳ－3	Ⅳ－4	Ⅳ－3



第１図　石川県における弥生時代中期後半の遺跡

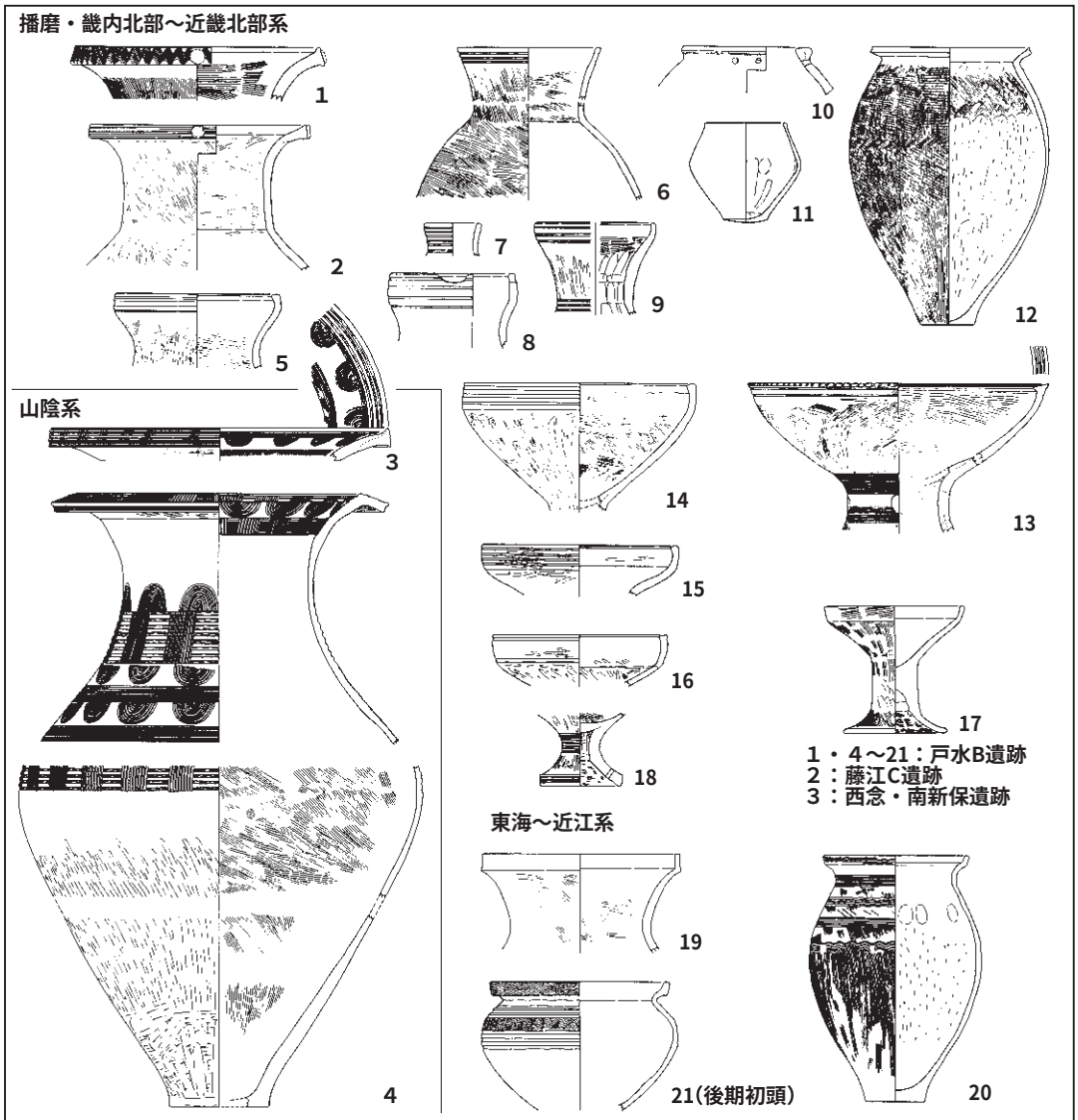
弥生時代中期後半土器の併行関係

戸水B式土器と各地域の土器との併行関係を考えていくために、まずは戸水B式に属する金沢市戸水B遺跡、同藤江C遺跡、同西念・南新保遺跡出土土器の外来系土器の分析から始めたい。

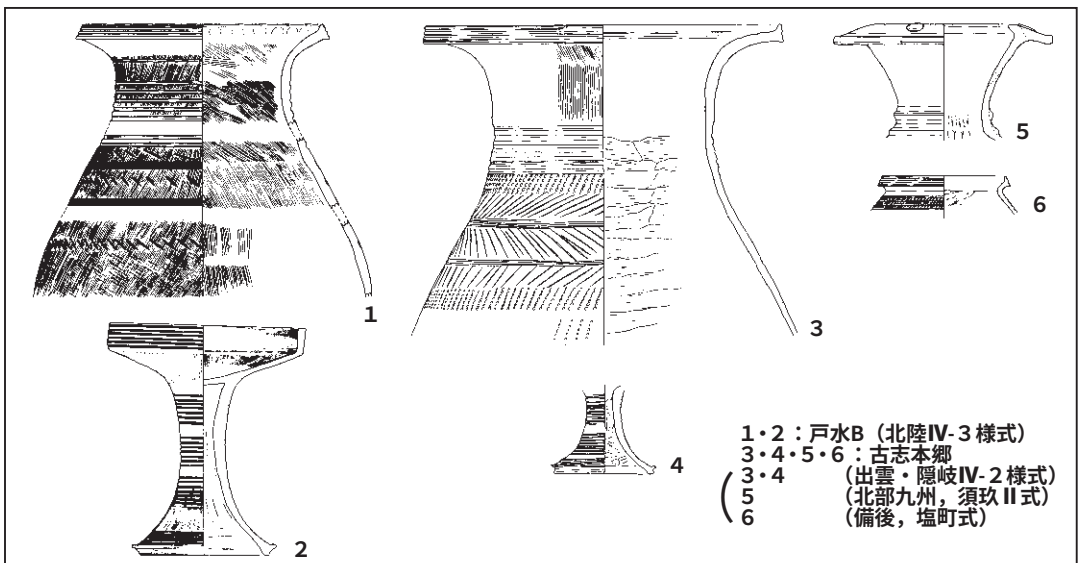
第２図はこれらの土器をまとめたものである。外来系土器は、①近畿北部（丹波・丹後）～畿内北部（摂津・山城）・播磨、②近江～東海、③山陰・吉備・西部瀬戸内の大きく３つの系譜に分けることができる。

前節でも指摘した通り、当該期は凹線文系土器の相対的な量比は増えるのであるが、畿内北部や近畿北部などでみられる凹線文の衰退現象が看取されるのであり（第２－１図）、そこから判断すれば、『弥生土器の様式と編年』（寺澤・森岡編1990）における摂津Ⅳ－４様式、山城Ⅳ－３様式、または田代弘氏が北丹波の由良川水系の土器を分析して設定した（北丹波）Ⅳ－３様式（田代1992）とほぼ併行すると考えておきたい（第１表）。

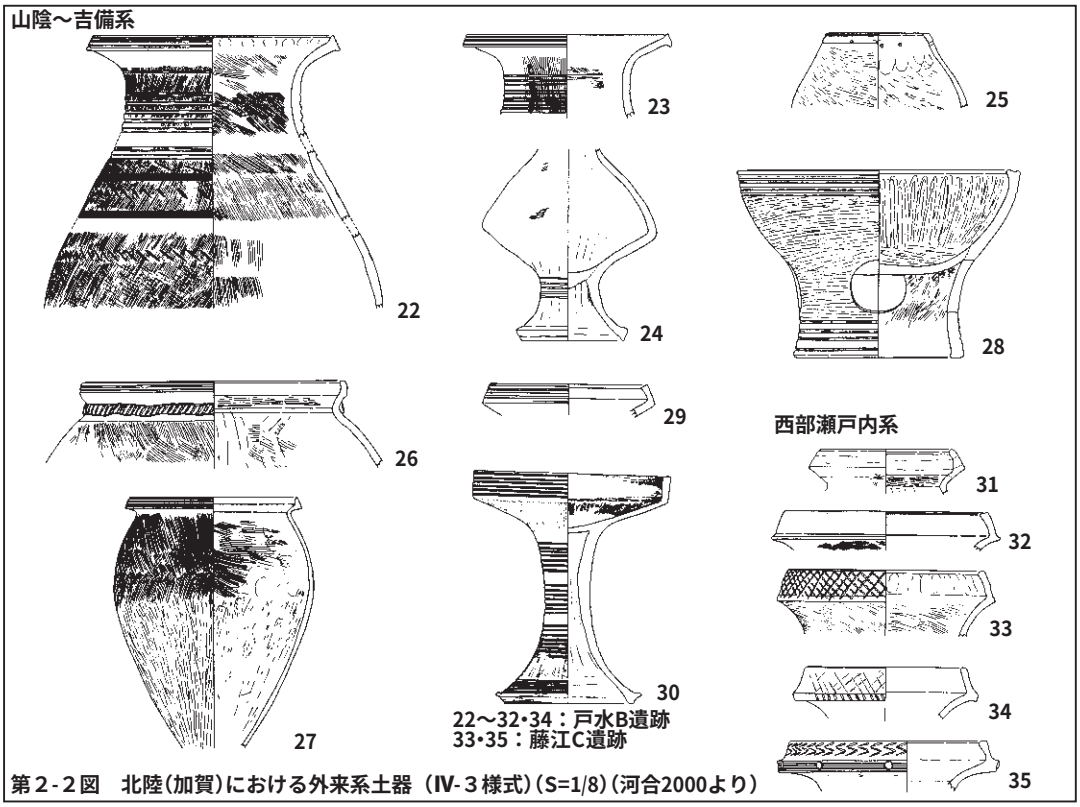
また、当該期は山陰・吉備・西部瀬戸内などの遠隔地に系譜をもつ土器が比較的多く出現する時期である。第２－２図にその一部の土器について集成を行ってある。器種は広口壺形土器（以下「形土器」を省略）・長頸壺・無頸壺・甕・台付鉢・高杯など多様であり、活発な交流の存在を物語る。このうち、併行関係を考えていく上で、重要な情報をもつと考えるものを第３図と第４図に図示した。



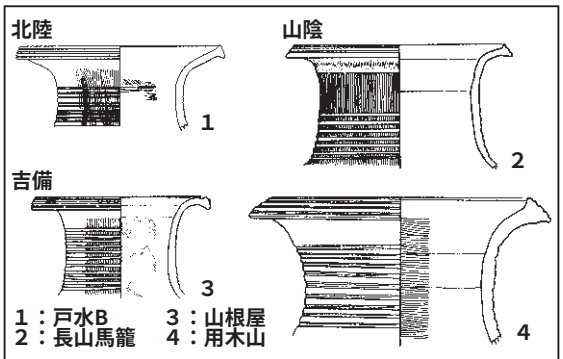
第２-１図　北陸（加賀）における外来系土器（Ⅳ-３様式）（S=1/8）（河合2000より）



第３図　北陸Ⅳ-３様式と各地域の併行関係を示す資料（S=1/8）



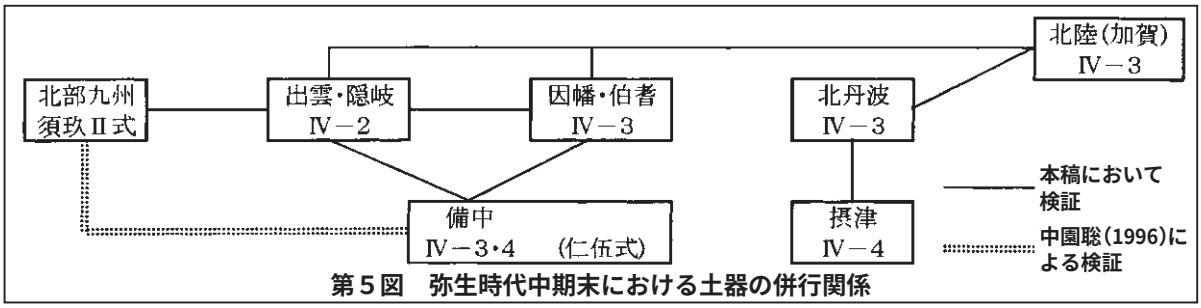
第２-２図　北陸（加賀）における外来系土器（Ⅳ-３様式）（S=1/8）（河合2000より）



第４図　各地域の長頸壺型土器（S=1/8）

第３図には、戸水B遺跡出土の山陰に系譜をもつと考えている広口壺（１）・高杯（２）とそれと関連をもつと考えられる資料である島根県出雲市古志本郷遺跡出土土器（松山1998）を図示した。第３図３は山陰地方に比較的多く存在する加飾広口壺であり、報告者によれば、『弥生土器の様式と編年』（正岡・松本編1992）における出雲・隠岐Ⅳ－２様式に属する資料であるとされている。これは戸水B遺跡出土の加飾広口壺（１）と形態・法量や文様構成等の面で関連した資料と考えられる。第３図３と同じ大溝から出土した高杯（４）も戸水B遺跡出土の高杯（２）と関連した資料として挙げることができる。これらから戸水B式（Ⅳ－３様式）と出雲・隠岐Ⅳ－２様式が一部併行するものと考えておきたい。第３図３・４が出土した大溝からは、このほかに北部九州に系譜がたどれる鋤形口縁をもつ須玖Ⅱ式の壺（５）と備後に系譜がたどれる塩町式の甕（６）が出土しており、間接的にではあるが戸水B式（Ⅳ－３様式）と須玖Ⅱ式・塩町式が一部併行することを示す資料と考えておきたい[3)]。

第４図には、戸水B遺跡出土の吉備に系譜をもつと考えている長頸壺（１）とそれと関連をもつと考えられる資料を図示した。第４図１は頸部外面にタテハケを施し、その後10条以上のヘラ描沈線文を施している。これと同じ製作技法を用いるものは、中期後半では備中北部Ⅳ－２様式以降に出現すると指摘されており（高畑1992）、第４図３がその一例である。第４図１と近い形態を有するものは山陰（伯耆・出雲）・吉備に広くみられるが、その中でも第４図１は製作技法や形態から判断して新しい要素をもつと判断できる資料であり、『弥生土器の様式と編年』における因幡・伯耆Ⅳ－３様式または備中Ⅳ－３・４様式（仁伍式）に属する資料と考えておきたい。



第５図　弥生時代中期末における土器の併行関係

以上の成果をまとめたものが、第５図である。これから判断して、西日本の中期末がだいたい併行するものと考えられる。このことは、弥生時代後期が西日本各地でそれほど時間差をもつことなく、ほぼ同時に始まったとの判断を導くことになるが、それは弥生時代後期土器の併行関係を追求した諸先学の研究成果（豊岡1985、中園1996、杉本1996、小山田1996、平井典1997）からすでに指摘されていることでもあり、これらの内容とも矛盾するものではない。

北陸弥生時代中期後半の暦年代観

前章では、弥生時代中期後半土器の併行関係を考えてみた。本章では、これを基礎として、諸先学の暦年代観を参考にしつつ、北陸の弥生時代中期後半の暦年代について考えることとしたい。

当該期の暦年代を探る試みは、近年活発に行われており、畿内・中部瀬戸内の弥生時代中期と後期との境を紀元１世紀第１四半世紀～第２四半世紀に位置付ける考え方（秋山1996、平井勝1996、杉本1996、森岡1998、都出1998）と紀元１世紀第３四半世紀以降に位置付ける考え方（豊岡1985、寺澤1985・1998・1999）が存在している（第２表）。前者は理化学的測定年代・年輪年代を重視し、貨泉が畿内・東部瀬戸内の弥生時代後期初頭の土器に伴う事実（平井泰1990）を考慮して、その貨泉の初鋳年に限りなく近付けて、弥生時代後期初頭の年代を捉えようとする考え方である。後者は貨泉が王莽代のみならず、後漢初期に下る資料を多数含んでいる点と、北部九州の後期前葉の遺構から検出された舶載鏡について、複数時期の鏡式が含まれており、流入から副葬に至るまでの時間の経過を考慮した考え方である。

筆者は、前者の考え方が現状では無理がない考え方であると評価している。それは、①北部九州の弥生時代後期前半の中国鏡の混じりは、鏡の初鋳年代に関する限りにおいて、井原鑓溝や桜馬場出土の方格規矩四神鏡や三津永田104号甕棺の獣帯鏡が、ほぼ同時期に製作された鏡であることが明らかにされていること（岡村1990・1996）、②土器から見て、北部九州と中部瀬戸内・畿内の弥生時代後期の始まりがほぼ併行すること、③年輪年代学の成果との整合性、などからそのように判断している。

この説を採用すれば、前章での検討の結果から、北陸における弥生時代後期の始まりも北部九州や東部瀬戸内・畿内とそれほどの時間差がない蓋然性が高いと考えられるので、北陸における弥生時代中期と後期との境の暦年代は、紀元１世紀第１四半世紀～第２四半世紀に相当すると考えられ、そこから戸水B式（北陸Ⅳ－３様式）の暦年代は、森岡秀人氏の暦年代観（森岡1998）も参考にすれば、紀元前１世紀第４四半世紀～紀元１世紀第１四半世紀に比定されるものと考えている。

おわりに

本稿では、弥生時代中期後半における土器の併行関係を整理し、それを基礎として、大まかにではあるが、北陸の弥生時代中期後半に暦年代を与える作業を行ってきた。大まかな検討であるので、今

第２表　弥生時代暦年代対比表（近畿・北部九州）

暦年代		近畿編年			北九州編年		
		森岡1998	都出1998	寺澤1998	寺澤1998	柳田1983	橋口1979
紀元前	100	Ⅳ-１様式	第２様式	第Ⅱ様式	城ノ越式 1	須玖式 3	KⅡC式
		Ⅳ-２様式	第３様式 古	第Ⅲ様式 1	須玖式 2		
		Ⅳ-３様式	第３様式 新	第Ⅲ様式 2	須玖式 3	須玖式 4	KⅢa式 KⅢb式
			第４様式	第Ⅳ様式 1	須玖式 4		
		Ⅳ-４様式		第Ⅳ様式 2	須玖式 5	須玖式 5	KⅢc式
	0			第Ⅳ様式 3			
紀元後		Ⅴ-１様式	第５様式 古	第Ⅴ様式 0	高三潴式 1	高三潴式 1	KⅣa式
		Ⅴ-２様式		第Ⅴ様式 1		高三潴式 2	KⅣb式 KⅣc式
	100	Ⅴ-３様式	第５様式 中	第Ⅴ様式 2	高三潴式 2		
						高三潴式 3	KⅤa式

後検証してゆく必要性を感じているものの、この種の研究を行っていく上で、一定点を築くことができたのではないかと考えている。今後は、弥生時代を通して暦年代を与える作業を、北陸でも行っていく必要があると感じている。

註

1）　筆者の知り得た範囲では、栃木英道氏が弥生時代後期後半（法仏式）と同終末（月影式）との境を紀元190年とする見解を示していること（栃木1995）を知るのみである。

2）　北陸では、西日本に系譜をもつ凹線文を施した土器に加えて、これを施していない土器であっても、中期後半（第Ⅳ様式）の時期に凹線文を施した土器とともに受容した外来系土器（九州、西部瀬戸内、近江、東海を除く）については「凹線文系土器」という用語を用いている。

3）　中園聡氏は、九州と瀬戸内の土器の併行関係を整理しており、北部九州の中期後半（須玖Ⅱ式）と瀬戸内の中期後半（第Ⅳ様式）が併行する可能性が十分にあるとの指摘をしている（中園1996）。

附記

2000年２月26日・27日に開催された北陸弥生文化研究会の席上では、赤澤徳明・石黒立人・伊庭　功・宇野隆夫・國分政子・小竹森直子・近藤　広・佐々木　勝・篠宮　正・深澤芳樹の各氏から土器の系譜・時期についてのご教示をうけ、校正の段階で、若干の手直しを加えている。記して感謝したい。

参考文献

秋山浩三1996「B.C.52年の弥生土器－池上曽根遺跡の大型建物・井戸出土資料と年輪年代－」
『大阪文化財研究』11　大阪府文化財調査研究センター

岡村秀典1990「中国鏡による弥生時代実年代論」『考古学ジャーナル』325　ニュー・サイエンス社

岡村秀典1996「中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代」『第40回埋蔵文化財研究集会　考古学と実年代』Ⅰ

河合　忍1996「北陸弥生土器様式の変革過程」『石川考古学研究会々誌』39　石川考古学研究会

河合　忍2000「弥生時代中期後半における土器交流システムの変革とその背景」
『石川考古学研究会々誌』43　石川考古学研究会
楠　正勝1989『金沢市西念・南新保遺跡』Ⅱ　金沢市教育委員会
楠　正勝1992『金沢市西念・南新保遺跡』Ⅲ　金沢市教育委員会
楠　正勝1996『金沢市西念・南新保遺跡』Ⅳ　金沢市教育委員会
小山田宏一1996「近畿地方暦年代の再整理」『第40回埋蔵文化財研究集会　考古学と実年代』Ⅰ
杉本厚典1996「東部瀬戸内と北部九州の弥生時代後期初頭の土器編年の平行関係」『香川考古』５　香川考古学研究会
高畑知功1992「備中地域」『弥生土器の様式と編年－山陰・山陽編－』木耳社
田代　弘1992「由良川流域の弥生時代中期土器について」『京都府遺跡調査報告書』17
京都府埋蔵文化財調査研究センター
都出比呂志1998「総論－弥生から古墳へ－」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
寺澤　薫1985「弥生時代舶載製品の東方流入」『考古学と移住・移動』同志社大学
寺澤　薫・森井貞雄1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅰ－』木耳社
寺澤　薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅰ－』木耳社
寺澤　薫・森岡秀人編1990『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』木耳社
寺澤　薫1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
寺澤　薫1999「紀元前五二年の土器はなにか－古年輪年代の解釈をめぐる功罪－」
『考古学に学ぶ　遺構と遺物』同志社大学
栃木英道1995「考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
豊岡卓之1985「畿内」第Ⅴ様式暦年代の試み」『古代学研究』108・109　古代学研究会
中園　聡1996「弥生時代中期土器様式の併行関係－須玖Ⅱ式期の九州・瀬戸内－」『史淵』133　九州大学文学部
中屋克彦ほか1992『金沢市戸水B遺跡－第４・５次調査－』石川県立埋蔵文化財センター
中屋克彦ほか1994『金沢市戸水B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
中屋克彦1997『金沢市藤江C遺跡』Ⅱ　石川県立埋蔵文化財センター
橋口達也1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI（中巻）福岡県教育委員会
平井典子1997「弥生時代後期における中部瀬戸内と北部九州の交流」『古代吉備』19　古代吉備研究会
平井　勝1996「理化学的年代測定からみた暦年代－中・四国地方－」
『第40回埋蔵文化財研究集会　考古学と実年代』Ⅰ
平井泰男1990「岡山市高塚遺跡出土の『貨泉』」『古代文化』42-7　古代学協会
深澤芳樹1986「弥生時代の近畿」『岩波講座　日本考古学』５　岩波書店
正岡睦夫・松本岩雄編1992『弥生土器の様式と編年－山陰・山陽編－』木耳社
増山　仁1988『金沢市磯部運動公園遺跡』金沢市教育委員会
増山　仁1992『金沢市専光寺養魚場遺跡』金沢市教育委員会
松山智弘1998『古志本郷遺跡第６次発掘調査報告書』出雲市教育委員会
溝口孝司1987「土器における属性伝播の研究－凹線文の発生と伝播－」
『東アジアの考古と歴史　岡崎敬先生退官記念論集』中　同朋舎出版
光谷拓実1995「二口かみあれた遺跡出土木製品の年輪年代」『二口かみあれた遺跡』石川県志雄町教育委員会
光谷拓実1996「年輪年代法」『弥生の環濠都市と巨大神殿』池上曽根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会
森岡秀人1990「各地域の併行関係・解説」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』木耳社
森岡秀人ほか1998「弥生時代の暦年代をどう考えるか」『弥生時代の考古学』学生社
森田克行1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』木耳社
柳田康雄1983「伊都国の考古学－対外交渉のはじまり－」
『九州歴史資料館開館10周年記念　太宰府古文化論叢』吉川弘文館
湯尻修平1975『金沢市戸水B遺跡調査報告』石川県教育委員会